

◆瑠須庵露地解説

①船塚（晴明塚、亀塚）と歌

瑠須庵露地には今尚現存する船塚（別名：晴明塚、亀塚）がある。船塚に残る伝説によれば、

「その昔、観世音の浄土、補陀落山の蓮池に住む龍が飛び出し、この地で大亀に化け、千年の間、悪さをした。観世音の命により安倍晴明が、この塚に封じ込めた」

と云うものだ。塚石の頭は、古生代の化石で母屋側からは亀頭に、茶室側からは龍頭に見える珍石である。また、この船塚には古田織部が塚を見て詠んだと云われる歌も残されている。その歌は、

船つなげ 雪の夕べの わたし守 たれゆえさのみ 身をつくすらん

と云うものだ。この歌が古書店で買い求めた「古田織部の生涯（一の瀬武著）」の中に掲載されていたのには腰を抜かすほど驚いた。その後、久野治氏の著書の中にも紹介されていた。共に歌の出所、歌意共に解説されてはいないが、これは当然のことだ。

何故なら歌の詠まれた場と歌意が理解された時こそ天下の一大事、織部が隠れ切支丹であることが、白日の下に晒されることになるからである。では、この歌の本意を瑠須庵伝来の御話そのままに紹介致しましょう。

◆「雪の夕べ」とは？

そもそも「雪の夕べ」とは何を意味しているのか？この言葉には、それに纏わる伝説が隠されている。

その昔、臘間（ローマ）の国に聖母サンタマリア昇天の奇跡があった。その後、戦乱が続き百年余り後には、その場所さえ分からなくなっていた。ある時、奇特ある徳人が、その聖地を捜し出して聖堂を作らんと決意した。しかし誰に聞くも杳としてその場所は判明せず、虚しく日々を重ねていた。

そんなある日（一説には聖母が昇天した日）、奇特ある徳人は夢を見た。サンタマリアがその聖地に雪を降らせると言うのである。それも三日後に…。徳人は大いに喜んだが、瞬時に失望に変わった。時は夏の土用であったのだ。外は一声の蟬時雨、本当に真夏日に雪が降るのであろうか？

一日目が終わった。二日目も変化なし。蟬の声に埋まっていた。三日目、暑かったが

蝉の声がせぬ異様な朝を迎えた。昼には日輪が厚い雲に覆われ、その後徐々に冷え行き、ついに夕べには雪がちらちらと降って来た。雪は止むことなく翌朝まで続き、辺り一面雪の原となった。その一角、見るも神々しく厳かな所があった。そこが聖地であった。聖堂は、やがて今に伝わるサンタマリア大聖堂となった。

と言うものだ。「船つなげ…」の歌意を単純に解釈すれば、

「雪の夕べに船が繋いであるな。この船頭は一体誰の為に、身をつくしているのだろうか？」

となる。「わたし守」とは船頭ではなく神の世界と人を結ぶ神審者（さには）であろう。古田織部は瑠須庵を茶室にあらずして、ローマのサンタマリア大聖堂をイメージして創作したのだ。天井を見るに、他の茶室では決して見る事の出来ぬ細工がしてあることに注目して欲しい。天井全面すのこ、裏に和紙を張り巡らした天井からは光が差し込むよう工夫されている。そう教会のステンドグラスである。主の光は天上より来るのだ。床壁に目を移せば、そこは二重壁になっており、仏龕が嵌め込まれている。中に収まるは聖母、雪のサンタマリア像である。

話を「船つなげ…」の歌に戻そう。この歌には対になっている歌がある。それは「雪の夕べ」に対して「雪の朝」という言葉が入る歌だ。

明わたる 空の広さや 雪の朝 鳥なき花さく 御堂はここか

瑠須庵には銘を「雪のあした」とする練込志野茶碗が伝来する。今日でも復活祭やクリスマス、聖母マリアの祭祀に使用される。また興味あることに京の名家、藪内家の露地にも「雪のあした」という銘の石灯籠がある。藪内家の初代、剣仲紹智の妻は古田織部の妹であった。伝来の茶室は織部より譲られた燕庵である。石灯籠は東山御殿の事物と伝えられると聞くが、どう見ても「雪の朝」の茶室を照らす意味での灯籠に見えて来る。

瑠須庵の茶は、今も昔も宗偏流である。藪内流では行かぬ理由がある。もし宗家が災害などで燕庵焼失の時は、その門弟の中で一番古い時代の燕庵型茶室が宗家へ移築されるという決まりがある。故に床壁の「からくり」が発覚せぬよう、わび茶の極致、宗偏流なのであります。

②瑠須庵猿ヶ辻 申ヶ辻内を見る。

悪鬼神や死霊が出入りする良の面鬼門に対し、裏側の申は瑠須庵水屋より見れば、申ヶ辻と言われる裏鬼門の真っ只中、強力なる鬼門封じの形式を現し平安の闇を貫いた陰陽宿曜術が至るところに張り巡らされた、難攻不落の観世音となっていることに気

付かされるがまだある。今一つの鬼神の出入り口と言わば、戌亥の天門であるが、戌亥にはなんと弁財天が祀られ、誠にここは陰陽師の館と言われる所以である。

③貴船の蹲

船塚上に置かれた蹲。嘗ては古田織部所持の名蹲であったが、明治四年の弾圧により壊され酷く割れている。嘗ては瑠須庵最奥の地、「入らずの藪」の中に隠されていた。

④如来石仏

船塚の頭部分の左側に置かれた如来の石仏。鎌倉時代。亀が逃げて悪さをしないよう見張って居る。

⑤蛸石

安倍清明と荒ぶる神「足短侮蹉膿跌王（あしみじかぶさのてつおう）」に所縁ある石。平安の昔、熱田の漁師が蛸にされ海中に消えて沈んだという恐ろしき伝説が残されている。

⑥鯛石

鉄さぶ鞍馬の鯛の姿に見立てた石。蛸石の近くにある。

⑦乙姫の石像

露地中程にある珍しい乙姫の石仏。おそらく日本中にこれ一点だけかと思われる。他に類を見ない。昔は彩色されていたと聞く。緋の袴姿の乙姫が亀の背に立つ石像である。

⑧鯉石

鯉に見立てた露地石。蛸や鯛や鯉、乙姫とくるともうお分かりかも知れませんが、瑠須庵の露地は昔話の「水江浦嶋子（浦嶋太郎）」をモチーフにして作庭されております。茶室軒内土間の躡口横にある小姓石には、数匹の蝦に似た石紋まで浮いている念の入用です。誠に鯛や鯉の舞踊りであります。この物語性を茶に取り入れたのも、無論古田織部であります。

⑨蜜柑彫の蹲と餡餅灯籠

普段は羊歯で覆い隠され姿も見せぬ蹲。蜜柑彫とはその名の通り、内部を蜜柑の如く見事に円く彫り込まれている。口の割に水量が多く古田織部によって考案された。今

も織部の供養祭りには、この水が使われる。

明治四年の弾圧でも気付かれず無傷でありました。餡餅灯籠とは餡ころ餅のような形をした石灯籠。瑠須庵露地曼荼羅の法灯と云われ、母家持仏堂の観世音の燈明が移される。共に伝古田織部所持。

⑩一本踏鞴の化け南天

その昔、織部は「京屋敷の露地の一角に真赤な実のなる南天あらば、画竜点睛となるが」と思っていた。お付きの御家来衆の一人が「ならば叡山の一寺の前に見事な南天が自生してござる。某が種など頂きて参りましょうぞ」と申した。

叡山僧は「これはこれは、天下の織部殿の御所望とあらば、南天の種とは言わず、根土ごとお持ち下されませ」と鋤にて掘り起こし、薦にて包みて持たせてくれた。秋には真赤な実が成り、見事な露地となったが、異変は雪の降る頃に起きた。異様な一つ目入道が出現するのだ。一本足に一枚歯の下駄を履き、鉦をカーン、カーンと叩き回して動き回る。仰天の女子供や郎党が「出たぞ出たぞ！」と騒ぎ立てる。織部は叡山に登った。南天は東塔の総持坊辺りの自生のものだったが、織部の話を聞いた総持坊の僧は腹を叩いて大笑いした。

「織部殿、それは化け物にあらずして一つ目小僧は滋忍和尚でございます。天台十八代坐主、良源にその人ありと言わせた弟子が滋忍です。修行僧が怠け、酒や女を買いに叡山を下りるようなことがあっては一大時と、一つ目で睨みつけて鉦を叩くのです。この頃、鉦の音がせぬと思うておりましたが、織部殿の露地では叡山が困りますので、南天の実は悉く摘みまして叡山に戻しましょう。」

以後、織部の京屋敷の南天は、成らずの南天となった。その根株分けの南天が瑠須庵南天である。先の戦火で焼失したが、戦後芽を出し、一本踏鞴の化け南天として復活した。雪の降る夕べなど、突然カーン！と鳴るような気がして今も耳を敬っております。

⑪踏鞴黒鉄の金輪（五徳）

瑠須庵の渡り廊下は船塚を取り囲むようにあるが、その丑寅角に踏鞴黒鉄（たたらくろがね）の五徳がぼつねんと置かれているが、入梅でもその辺りは乾いているという瑠須庵七不思議の一つ。この五徳には「金輪のコハリメ」の伝説がある。

瑠須庵露地丑寅（東北：鬼門のこと）から黄昏時になると、髪も棘に金輪を乗せ、白装束の女が出現することがある。これぞ「コハリノメ」である。出らば片膝立てて、

その場に伏し決して頭を上げぬこと。これぞ服従の印なり。目が合えば即死と云う。コハリノメは蓬莱石の前に立ち「恨めしや恨めしや、知るまいぞ知るまいぞ…」とクルクル舞いて、やがて瑠須庵丑寅の踏鞴の五徳の前でピタリと止まる。其の時、人が平伏すのに気が付くと、一気に人身に近付き、上より牙ばと見下ろす。ここが我慢、辛抱の時だ。ほどなくコハリノメ、「恨めしや恨めしや、知るまいぞ知るまいぞ…」と丑寅に姿を消す。

まるで能舞台のアトシデのようだが、我慢辛抱出来た人身は、それ以後一生金に困ることなしに過ぎると伝えられる。

コハリノメに漢字を当てると「小針の女」となる。太古、愛知県の小牧地方には小針族と呼ばれる豪族がいたが、熱田の尾張族に討ち滅ぼされたと云う。コハリノメが熱田神宮所縁の蓬莱石の前で足を止めるのは、滅ぼされた恨み故のことであろう。瑠須庵は古くより「鬼家（おやや）の地」と呼ばれ畏怖の念を抱く地でもあった。

最後に瑠須庵にはコハリノメに纏わる歌が残っている。

コハリノメ ねぶりかわする ふみわけの あるぞたのもし るすのうちろじ

意味不明であるが、コハリノメが舞がてら「恨めしや恨めしや、知るまいぞ知るまいぞ…」に続き、「ねぶりかわする」の歌が出る。手には舞扇を持っていたが、これを目撃し、控えに書き写した若衆は三日後に死亡したと伝わる。

⑫熱田の蓬莱石

熱田神宮所縁の蓬莱石。慶長年間、名古屋城築城の折、石奉行加藤清正の命により、あらゆる所から石が狩り集められた。その作業場に熱田出身の人夫がいた。人夫は畚で担がれた石を見て「あっ！蓬莱様だ！」と気が付いた。その石は、熱田の森から運ばれた蓬莱石だったのだ。瞬時、石は人夫の足上に落ち大怪我を負った。

作事奉行であった古田織部は、すぐさま使いを出し、熱田の森に戻す手配を行ったが、報せを聞いた熱田の神職の皆は意外なことを言った。

「およそ熱田の森と云うは、例え枝葉の一つ陀に森より出るものはなく、ましてや蓬莱石など見たことも聞いたこともありません。よって戻す御手配など全く無用ですので、そちらで御処分なさって下されませ。」

とこう言うのである。織部は人夫が大怪我を負った不吉な石など、上様にもしものことがあっては一大事とばかり、瑠須庵の内露地に据え置かれた。瑠須庵露地は、安倍清明塚と一組みとなっていることもあり、名古屋城の石狩にも合うこと無く、露地が今日まで残るは、これもひとえに古田織部の徳による所が大であった。

⑬石人

名古屋最古の等身大石人。尾張族所縁の石人で、元は瑠須庵露地の晴明塚の石人であった。今も確りと晴明塚を見る。戦前まで一対でありました。安倍晴明塚と石人は水江浦嶋子(浦嶋太郎)の伝説によって、その本意は海神ワタツミの露地曼荼羅となり、その本地仏が母家持仏堂の霊木観世音であり、山王日吉仏である。毎年水無月十日に浩月山地蔵寺住職によって供養祭があり、月供養は無池山圓隆寺住職によって執り行われている。

⑭入らずの藪とジュリアンアントンの石

入らずの藪前の露地石に関守石が置かれ、これより中には入れませんが、入らずの藪奥に在るのは、ジュリアンアントン様の石である。明治四年の弾圧により割れておりますが、石の下には血に滲むクルスが埋められていると伝えられる。

アントンは安藤が訛ったものと言われ、武士説、刀鍛冶説、女性説などもあり、その人物像はよく分からなくなっている。入らずの藪(現在は棕櫚竹)は切支丹信徒の聖遺物の集合地ではないかと伝わっております。昔は鍬、鎌、備中が、今では鉄のスコップや脚立などが置かれ、一見それとは分からなくなっています。

⑮魘り石

本来「唸り」と書くが瑠須庵では古くより魘り石の字を当てる。名古屋城築城時、あろうことか何処ぞの弘法大師の霊場から運ばれた石が夜な夜な魘りを上げた。恐れをなした石奉行が織部に話せば

「上様にもしものことがあれば、天下の一大事、瑠須庵に打ち捨てるがよろしかろう」

とすることになり、かくして鳥居替わりの丸太と注連縄に囲まれ、瑠須庵露地の踏み分け石となる。元々瑠須庵には織部殿に頂いた「ねぶ川石」があったが露地丑寅の石とされた。

瑠須庵は古くから「鬼家(おやや)の地」と呼ばれていました。その理由は、ご覧のように魍魎魍魎とでも言いましょうか、何やら曰くつきのもので敢えて数多く残されているからです。それはこの地が人目に触れぬよう、人が遠ざかるように仕向けられたように思えます。

これらは全てある目的の為に集められたのでしょう。その目的とは、聖堂でもある茶室を隠すためだったのではと思えるのです。最後に瑠須庵に伝わる不思議な童歌を紹介致します。

◆門外不出 初公開 「古田織部像（興正寺蔵）の童歌」 神審者（さにわ）的言
霊の仔細

織部の正の御姿は	御姿は
二間下がって半眼で眺むれば	眺むれば
不思議不可思議摩訶不思議	摩訶不思議
久瑠須の像ぞ浮かび出る	浮かび出る
瑠須の庵の始まりは	始まりは
織部の正の墓参り	墓参り（カタコンベ）
二間下がって耳手を取らば	耳手を取らば
不思議不可思議摩訶不思議	摩訶不思議
微かに聞える祈りはオラショ	祈りはオラショ
パライソ パライソ サァンタマァーリア	

京都興正寺、古田織部像参拝の折、この言霊を唱えますれば、像に隠された十字が見えたと伝わって居ります。